



Data

監督・脚本：中川龍太郎
 出演：松本穂香／渡辺大知／徳永えり／吉村界人／忍成修吾／光石研／櫻山文枝

👁️👁️ みどころ

世界が認める若き才能、中川龍太郎監督に注目！そしてまた、大規模宣伝される、大手配給のくだらない邦画とは完全に一線を画した本作のこだわりに注目！まさに、ホッコリ、ホッコリ！

宮川澤、20歳。地方から東京へ。『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ (05年、07年、11年) の集団就職の時代とは全く違う昨今、引っ込み思案でロベタな彼女はどのように生きていくの？

目の前のできることからひとつずつ。祖母のアドバイスはそんなシンプルなものだが、それを実践していくと・・・？変わっていくもの、失われていくもの、それは仕方がないが、そんな現実はどう向き合えば・・・？久しぶりにいい邦画を観せてもらって、ありがとう！



■□■くだらない邦画が多い中、隠れた名作(?)を発見! ■□■

中川龍太郎監督の『四月の永い夢』(18年)は、私の情報には入っていたものの、「まあいいだろう」と思って見逃していた映画。そして、本作もチラシは観ていたものの、同じように「まあいいだろう」と思っていたものだ。しかし、情報を集めてみると、本作では「再開発」や「失われていく街」がテーマになっていたから、まちづくりをライフワークにしている弁護士の私としては、「これは観ておかなければ」と考えた。

他方、チラシにアップで映っている本作のヒロイン宮川澤役を演じる松本穂香の顔は、何となく『この世界の片隅に』(16年) (『シネマ39』41頁) でヒロイン・すずの声優を務めた女優・のんの顔と似ている。しかし、チラシを読むと、澤は故郷を離れて東京で働き

始めたものの、なかなか周囲に馴染めず苦労している女の子らしいから、いかにも今風。そして、今風の映画では、そんな彼女に優しく「寄り添って生きていく」という甘っちょろい企画が多いから、あまりその方面には関心なし。私の事前リサーチはそんなものだったが、本作が始まると意外にも・・・。

■宮川澪20歳、地方から東京へ！その生き方は？■

『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ（05年、07年、11年）は、ある意味では、青森から集団就職で東京に出てきた堀北真希扮する星野六子の成長物語だった（『シネマ9』258頁、『シネマ16』285頁、『シネマ28』142頁）。しかし、それは東京タワー建設中の1958年のことだ。

しかし、昭和30年代の高度経済成長から昭和50年代の土地バブルへ、そして平成の30年間を経て令和に入った今の時代でも、地方から東京への若者の流入は続いている。もっとも、本作の澪は六子と違い、祖母の久仁子（樫山文枝）が切り盛りしている長野の野尻湖近くに佇む民宿を閉鎖することになったため、という個人的な事情。また、現在日経新聞に連載されている『ミチクサ先生』における正岡子規のように、大志をもって松山から東京に向かったものとは全然違う、「仕方なしの上京」だ。

そんな澪が当面住むのは、亡くなった父の古い友人である三沢京介（光石研）が、東京の下町・立石で営む銭湯「伸光湯」の空いている部屋。これは、とりあえず澪の仕事が見つかるまでの仮の住まいだが、引込み思案で、どちらかというポーとしたタイプ（？）の澪は、東京で立ち立ちできるの？また、自分の生き方をしっかり見つけられるの？

■時給1000円弱のバイトはすぐに見つかったが・・・■

近時「働き方改革」の必要性が叫ばれているが、その問題と、正規雇用が減り非正規雇用（バイト）が増えてきたことの問題点は全く別。バイトは使用者にとっても雇用者にとってもある意味便利だが、それは短期的な視点であり、長い目で見ると、その安定性に大きな問題がある。しかし、何の資格も何の取り柄もない20歳の女の子澪にとって、意外に早く時給1000円弱のスーパーでのバイトが見つかったのはとりあえずラッキー。また、そんな澪を伸光湯の常連で京介とも親しく、自主映画を撮っている若者・緒方銀次（渡辺大知）とOLの島村美琴（徳永えり）が仲見世通りの飲み屋で祝ってくれたのも、ありがたいことだ。ところが、その後スクリーン上に登場する澪の仕事ぶりを見ていると、アレ・・・。こんな仕事ぶりでは「クビ宣告」されるのも仕方なしだが、さて、澪の次の仕事は？

宮沢りえ主演の『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマ39』28頁）は銭湯を舞台にした名作だったが、同作を見ても、本作を見ても、お湯を沸かす作業はもちろん、洗いの掃除が意外に大変な労働であることがよくわかる。それは民宿を経営していた祖母の

久仁子（樫山文枝）が洗い場を掃除しているシーンを見ても同じだ。そんなシーンを見ていると、やっぱり今ドキ個人経営の銭湯を商売として成り立たせるのも到底無理だということもよくわかってくる。

ある日、たまたま濡は思いついたように伸光湯の洗い場の掃除をしていたが、その手つきはあまりにひどい。そこで、それを見かねた（？）京介が自ら率先して濡に掃除の仕方を教えてやると・・・。

■□■古いまち並みと映像へのこだわりに注目！■□■

12月1日にみた中国の胡波（フー・ポー）監督の『象は静かに座っている』（18年）は、234分にもものぼる、暗い映像の中での長回しによる4人の主人公の会話劇だった。そのため、その鑑賞は大変だったが、そのアピール力にビックリさせられた。本作はそこまでのインパクトはないが、冒頭のスクリーン上に登場する野尻湖の美しい景色や、濡が上京してきた葛飾区立石の古いまち並みを撮影するについての、中川龍太郎監督のこだわりがよくわかる。また近時の邦画は何でもわかりやすくするためセリフが多くなっているが、本作は濡がもともと無口（ロベタ）なこともあって、濡のセリフは極端に少ない。その分、濡の友人である銀次や美琴のしゃべりの多さが目につくが、それが決して嫌味になっていないのは中川龍太郎監督の力量だ。

私は愛媛県松山市の生まれで、高校3年生までそこで過ごしたが、本作に登場する立石の下町風景は、そんな私にも懐かしく思えるもの。「近代都市法」の1つとして1968年に都市再開発法が制定されたことによって、「市街地再開発事業」が次々と施行されるようになった。そして、規制緩和と民間活力の導入を軸とする「中曽根アーバン・リネッサンス」の展開の中でその施行例は飛躍的に広がり、土地バブルの1つの要因にもなった。しかし、立石の旧商店街で施行されている再開発は？ちなみに、日本の都市法制は複雑かつ難解だから、本作のパンフレットやチラシそして中川龍太郎監督のインタビューですら、市街地再開発事業と土地区画整理事業の区別がしっかりされていないのではないかと思われる節がある。まあ、それは映画の本筋には関係ないが、スクリーン上ではハッキリ「再開発反対！」ののぼりが立てられているのだから、そこらは間違いのないように表示してほしいものだ。それはともかく、本作では古いまち並みと映像へのこだわりに注目したい。都市再開発法に基づく市街地再開発によって、立石にある伸光湯を含む古い商店街はいつたいどんな街に作り替えられるの？そのことの意味も、しっかり考えたい。

■□■このタイトルはナニ？—瞬どこかの宗教団体と誤解？■□■

本作冒頭は、濡が銭湯のお湯をすくい取り、それを見つめているシーンの中、詩の朗読から始まる。このタイトルを見て、この詩の朗読を聞くと、一見どこかの宗教団体の勧誘のようだが、この詩は、明治大正期の詩人山村暮鳥の『梢の巢にて』という詩集の中の詩

の『自分は光をにぎつてゐる』からとられているらしい。それにしても、「わたしは光をにぎっている」とは何とも意味シンド。なぜ、20歳の女の子、漣がそんな難しい詩を知ってるの？そしてまた、それを朗読しているの？

他方、本作では、そもそも漣の口数が少ないうえ、会話する相手そのものが少ないだけに、樫山文枝演じる祖母・久仁子との会話のないままのふれあいや、ちょっとした会話の重みが浮かび上がってくる。2人で並んで野尻湖を見つめ合う冒頭のシーンは、セリフが全くない中での美しいものだが、東京に出て来た漣が久仁子に電話するシーンでは、久仁子から「できないことより、できそうなことを」「目の前のできることをひとつずつ」、との言葉が返ってくる。この言葉自体は平凡なものだが、この言葉がああ時の漣の心の中にどこまで深く沁みこんだかは、松本穂香の抜群の演技力もあって観客の胸にも深く沁みこんでくる。こんな邦画は近時ほとんどなかったはずだ。言葉の量こそ、12月1日に観た中国の胡波（フー・ポー）監督の『象は静かに座っている』（18年）には全然及ばないものの、その計算され尽くした会話シーンの見事さは共通したものだ。

他方、漣が住み込んだ伸光湯は再開発事業が開始される中、「閉店します」の貼り紙を貼らざるを得なくなったが、本作ではそんな「失われていくもの」「失われていくまち」への想いをこめて、その美しい風景がスクリーン上に映し出される。私は再開発事業そのものを否定する立場ではなくむしろ肯定する立場だが、本作のスクリーン上に映し出される伸光湯や飲み屋街の風景を見ていると、そんな私ですら、何とかそのまま残したいと思ってしまうほどだ。しかして、中川龍太郎監督は本作をなぜ「わたしは光を握っている」という、わかったようなわからないようなタイトルにしたの？

ちなみに、本作のパンフレットには、宮台真司（社会学者・映画批評家）の『わたしは光をにぎっている』はノスタルジー映画ではない。なぜか。」と題する4頁にわたる「REVIEW」があるが、これはクソ難しい。私がこれまで読んだ映画のREVIEW、コラムで最高に難解といってもいいほどだ。しかし、そこでは「ボーっとしている」「リアクションする速度が遅い」漣の、今日的そしてまた本作における意義を多方面に渡って論じている（？）ので、こりゃ必読。どこまで理解できるかは保証できないし、その賛否も微妙だが、とにかく本作の鑑賞には、このクソ難しいREVIEWをじっくり読み解くことが不可欠だ。

■□■「しゃんとしましょう」を合言葉に！その実践は？■□■

本作のストーリーの骨子を要約すれば、①宮川漣、20歳。②ふるさとを出て、働き出した。③友達ができた。好きなひとができた。④その街も消える、もう間もなく。の4つ。そして、本作はTVのアホバカバラエティ番組や、今どきのくだらない邦画のようにベラベラとセリフで説明するのではなく、美しい風景を切り取り、積み上げていく中、漣が口ベタなこともあって（？）、必要最低限のセリフだけでそれを表現している。弁護士登録1

0年後の1984年から都市問題、再開発問題をライフワークにしてきた私は、たしかに伸光湯や、あの情緒ある飲み屋街はなくなっても、それに変わる新しい施設は必ず実現できるうえ、京介たち権利者の権利も「等価」で守られることも確信しているから、本作にみる市街地再開発事業に対しても肯定的。したがって、その点はきっと中川龍太郎監督の立場と私の立場は違うだろう。そんな私としては、失われたまち、失われた京介たちの権利、失われたまちの風景に代わる新しいまち、京介たちの保証された権利、新しく作り出された町の風景にも触れてほしかったが、まあそれは本作に対するないものねだり。

それはともかく、本作では市街地再開発事業完成後の立石のまちは描かれないが、せっかく伸光湯での仕事を1つずつ覚え、やっとその仕事に定着した感のあった漣は再開発事業によって伸光湯のある立石の町を出て行かざるを得なくなったのは残念。しかして、前述の「REVIEW」で宮台真司氏が「ポーっとしている」「リアクションする速度が遅い」と罵倒していた20歳の女の子・漣のその後は？

本作では、伸光湯を拠点として東京生活を送る中で少しずつ成長した漣が、最後に「しゃんとしましょう」と語る姿が印象的だが、さて、彼女はその言葉をいかに実践していく？本作には「それから1年後」の漣の姿が描かれ、たまたま京介はそれを目撃することになるのだが、さて、漣はどこで、ナニを？それは、あなた自身の目でしっかりと！

2019（令和元）年12月13日記